九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

里山の現状と潜在力及び市民保全活動の展望

重松, 敏則
九州芸術工科大学境設計学科

https://doi.org/10.15017/4061008

出版情報：芸術工学研究. 5, pp.1-11, 2002-08-30. 九州芸術工科大学
バージョン：
権利関係：

論文

里山の現状と潜在力及び市民保全活動の展望

Situation and Potentiality of Suburban and Rural Satoyama Woodlands Including Fragmented Urban Forest Reserves in Present Society

重松敏則
SHIGEMATSU Toshinori

In mountainous Japan, the majority of people historically used to live in the countryside and highlands. Every city was a reasonable size, and surrounded by farmlands of which interspersed or fringed with hilly coppice woodlands called satoyama. The satoyama played important roles of producing firewood and charcoal under cut and regenerative regime around 15 year interval.

The mosaic composition at different stages of reforestation arranged a series of various wildlife habitats from sunny stands to shaded ones. Then various flora and fauna could live there alternatively or in crossing over, and it also offered attractive seasonal landscape and amenity space for both local people and city dweller.

However, due to the fuel revolution, the satoyama lost the productive roles, and were abandoned or changed into conifer plantations. The abandoned coppice is now in poverty on bio-diversity, landscape and amenity space, according to the natural succession. Conifer plantation is also in serious situation by loosing such multiple roles as to prevent soil erosion and flood, to supply river water and wildlife habitat, timber production, including the above listed functions, under dense shading condition. Because labor shortage in rural villages and imported cheap timbers have made difficult to manage the plantation.

Rapid industrialization with population flow from rural villages to cities has caused depopulated areas and urban expansion of which swallowed suburban farmland and even satoyama. Now, about 80% of the Japanese live in cities, and this has fostered numerous environmental and social problems. Additionally, under global environmental issues, when urban residents live apart from the nature, this study revalued multiple functions of woodlands, and considered not only to improve and to restore the previous roles, but also bring out further potential from both abandoned coppice and conifer plantation, including fragmented urban forests as remains of satoyama.

To adopt the research results and to make up a social system to the actual situation, a case study was conducted about BTCV (British Trust for Conservation Volunteers) on its history, system and activity, and also reviewed the domestic circumstances of conservation activities in Japan. The other hand, since 1987, experimental research has been also conducted by raising or coordinating conservation groups, and assessed the potentiality. Based on the remarkable response of volunteers, since 1994, the International Conservation Working Holidays were launched jointly with BTCV. Forest improvement by volunteer activities, including dry stone walling for collapsed terraced paddy, showed not only to restore the habitats and amenity landscape, but also to make people understand an importance of ecological environment. It was recognized to generate friendship and partnership among participants, and also between rural villagers and city-dwellers, through the local conservation activities. These results were considered to be effective to spread and establish the sustainable human life in domestic and global.

1．はじめに

現代社会は化石燃料の多消費による大気汚染やヒートアイランド現象、大量の生活廃棄物の処理に伴う環境破壊や環境汚染等の問題に対応を迫られており、また、自然から隔離した緑の乏しい環境で生活する多くの都市住民は、かつての有機的な生活体験や自然とのふれあい体験を失い、世代交代もあいまって次第に装置化された環境の中で無機的な消費生活を送るようになっている[1,2]。人と人とのつながりが希薄になり、人間不信や人間疎外が進行するなかで、既に大人と子供を問わず様々な社会病理的な問題や事件が生じてもいる。このような実状を是正するとともに、地球環境危機の時代に対応したエネルギー循環型社会の再構築が要請されるとき[3]、里山が有する多面的な社会効果があらためて再評価されるのである[4]。それは我国の自然環境と祖先が営々と築き上げてきた文化遺産である里山・田園環境を保全し、未来の世代に引き継ぐためにも、また、世界的な食料危機や木材資源の枯渇に対する備え、地球環境問題に対応できる人材養成やライフスタイルの普及等の上でも重要である。

本論は以上のような観点から、里山の二次的な自然の成立ちと人間生活との密接な関係性、ならびに現在の生態的・社会的課題について論考するとともに、その潜在力の活用と持続的な保全・管理に対する市民社会の参加システムについて考察したものである。

2．生産と原風景としての里山

かつて、日本の多くの都市は周囲を緑の田園地帯で取り囲まれ、その背後には丘陵や山並みの緑が連なっていた。これらの丘陵や山並みの林地は、薪炭の生産林として、また、落ち葉や下草などを採取する農用林として歴史的に管理利用されたから、明るく開放的なアカマツ林や、クヌギ、コナラ、ヤマザクラ、クリなどの落葉広葉樹で構成される雑木林が広がり、林内にも野生ツツジ類や草花類（例えば冷涼な地域のカタクリや関西地方のササユリ）など多様な好陽性植物が生育していた。農家による周期的な伐採や柴刈り、落ち葉かきなどの手入れが林地に陽光を射し込ませ、春の開花や秋の紅葉、それにクリやドングリの結実など季節感あふれる、いわゆる里山の自然を生み出していたのである（写真１，２）。それは山火事や台風など自然の撹乱のもとで偶発的に発生するハビタットに依存していた動植物に、人間が多様性に富んだハビタット、すなわち、里山ビオトープを動態保全していたことになる。このような馴化された自然は人間にも親しみやすく、お陰で都市の子供も大人も単なる眺望だけでなく、自然との触れ合い体験や遊山の場として楽しみ、カブトムシやクワガタ採りに夢中になったり、山菜やキノコなど季節の味覚を楽しめることにもなったのである[5]。

一方、日本は国土のほぼ85%が山地で占められる宿命から、古来より山襞を縫って人々が分け入り、山畑や棚田を耕作してきた。当然、これらの農地や集落周辺には自給のみならず、都市のエネルギー需要を賄い、収入源となる薪炭林が広がっていたのである。このように、農山村と都市ともに化石燃料や化学肥料等に依存しない有機的な里山資源の循環利用が行われていた当時、地域的には過剰利用によるハゲ山化などの問題[6]があったにせよ、基本的には環境保全を果しながら、持続的な生産や生活が成立していた。

こうして、生活に密着した里山の自然が身近に存在し、四季折々の景観やアメニティ利用の場として親しまれたことから、都市と農山村を問わず多くの人々に共通の原風景としてイメージされることになったのである。

3．里山の今日的課題

しかし、化石燃料や化学肥料が普及した今日、生産的役割を失った里山は 40 年ちかく密生するままに放置され、昼なお暗い閉鎖的な空間となっている。また、それと前後した農山村からの人口流入による都市の膨張のために、近郊の田園地帯が次々と姿を消し、周辺の丘陵地や山裾の里山林も宅地造成等に飲込まれてしまった。それでも、都市化されたかつての丘陵地域では、開発を免れた里山の豊かな緑が周辺の住宅地や市街地から眺望でき、また、林内はともかく、相観的には今なお森の中に交じるヤマザクラの開花が春の訪れを告げ、コナラやクヌギの紅葉が秋を感じさせてくれる（写真３）。

ところが、その季節の景観や魅力が失われようとしているのである。里山管理されなくなって久しいため、関東以西の常緑広葉樹林域では、本来の自然林を構成するシイ、カシ類のような常緑広葉樹が旺盛に生長して樹冠を広げようとしており、既に九州北部ではヤマザクラ、クリなどの落葉広葉樹が競争に負けて次第に枝をすぼめ、衰弱や立ち枯れが目立ちだしている[7,8]。クヌギやコナラは今のところ多くの地方で健在だが、中・低木層は耐陰性に優れた常緑広葉樹で占められ、以前に見られた好

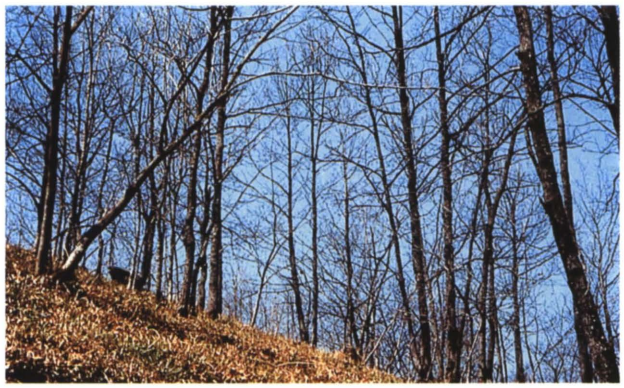

写真１　手入れが行き届き明るく開放的な早春の里山

写真２　新芽が萌え自生ツツジが開花する春の里山

陽性の多様な草木が姿を消しているのである（写真４）。コナラやクヌギも後継樹が育っていないから、寿命がくればいずれは姿を消し、また、多様な好陽性植物の消失は、これらに依存する里山型の昆虫類や鳥類などの生存にも大きく影響することになる。

もちろん、鬱蒼とした常緑広葉樹の森の重要性も無視できない。将来的にどんどん巨木に育って、都市のすぐそばにも壮大で神秘的な原生林が復元されつつあるからである。それは市民や子供たちに感動や霊感を与えるだけでなく、大樹をねぐらとするフクロウなどの野生生物が棲める環境にもなる。しかし、全域がそうなると、里山がもっていた季節感や種の多様性が身近なところから消えてしまい、それだけ生活の楽しみや自然との触れ合い体験の機会も少なくなる。これは、常緑広葉樹の問題がない北日本の里山でも例外ではない。低木類やササの繁茂のために林内の見通しがきかなくなり、これらの遮光の影響でカタクリ、イチリンソウなどの春植物も衰退し、かつてのような林床一面の開花景観が見られなくなっている。都市周辺の里山から人の行き来が遠のき、市民生活から遊離するとき、そこは更なる開発の恐れやゴミ捨て、防犯上の心配などが顕在化することにもなる。

一方、都市化の影響が及ばない農山村地域の里山では、よりいっそう深刻な問題が加わる。それは薪炭林の役割を喪失した里山の多くが、拡大造林政策によってスギ・ヒノキ人工林に林種転換されてしまったからである。問題は景観が単純になり季節感がなくなったというにとどまらない。その後の安価な輸入木材の普及により、これらもまた経済性を喪失して間伐管理等が放棄された結果、過密と林冠の鬱閉によるモヤシ林化や林床の裸地化のために、水源涵養能力や洪水防止能力が低下し、種多様性の貧化や土壌浸食の進行など、広葉樹の里山林よりも一層急務な環境保全上の問題に直面しているのである（写真５～７）。

写真３　季節の景観と豊かな緑を提供する都市内残存林
（福岡市鴻巣山緑地保全地区）

写真４　薪炭林の役割を喪失し自然遷移が進む里山
左：下枝が枯れ梢にわずかに枝葉を広げるヤマザクラ
右：中・低木層に常緑広葉樹が密生し暗く閉鎖された林内

写真５　尾根から谷までスギ・ヒノキ林に転換され単調化した景観

写真６　間伐されずに放置され林床の裸地化とモヤシ林化したヒノキ林

４．里山保全の現代的意義

ここで、森林が果す大気浄化、CO_2固定、水源涵養、土壌保全、それに単なる“緑”の役割に注目するなら、特に里山林でなかろうと自然林でも、あるいは的確に間伐管理されるならスギ・ヒノキの人工林でもよいことになる（図１）。そのまま放置して自然林に戻るのを待ってもよいし、建築用材林としてスギ・ヒノキ林に転換してもよい。しかし、それでは人生の楽しさや感動、地域の特色や美しさ、持続的な生活文化、そして、これらと密接な関係を有する動植物の多様性も半減してしまう。このような価値は情緒的で非生産的なものとして従来切り捨てられてきたものだが、人間生活の豊かさや文化性を保持する上で不可欠な要素である。しかし、これらは先に挙げた多面的な環境保全機能と同様に林地所有者に経済的利益をもたらすわけではない。季節の景観やアメニティ利用、種の多様性保全のために管理が必要だとしても、それを林地所有者に期待するのは困難である。

一方、生産的役割を失ったと述べたが、将来的には様々な潜在力を有している。一つは化石燃料消費による地球温暖化を軽減する一環として、里山林から得られる収穫物をバイオガスやバイオ発電用に活用することで、既に一部では試験や実用化も行われている。また、現在の建築ではプリント合板やプラスチック製品が多用され、解体によるゴミ問題や、火災及び焼却時の有毒ガス、日常的な環境ホルモンによる健康阻害等が深刻になっているが、里山で生産される本物の広葉樹材を家具材や建築材として、末永く大切に活用することも期待される。

それにはかつて行われていた薪炭生産に対応した15年前後の短周期の伐採更新方式のみにとらわれず、大径材生産に則した60年以上の長周期の伐採や択伐方式も

写真７　根系の一斉枯死と分解により風害跡地で発生した斜面崩壊

○環境保全機能：CO^2固定、O^2供給、大気浄化、水源涵養、土壌保全、気温調節、湿度調節

○防災機能：洪水防止、土砂崩壊防止、雪崩防止、延焼防止、防風・防潮・防砂

○生態的機能：野生動植物の生息環境保全、遺伝子保全

○生産的機能：建築材、家具材、工芸材、薪炭材、バイオマス資源、シイタケ榾木、きのこ、山菜、果実、狩猟鳥獣、堆肥

○アメニティ機能：やすらぎの景観、季節景観、感動・神秘景観、自然回帰、自然探勝、林間散策、ハイキング、林間での遊び、キャンプ、森林管理活動

○科学・教育的機能：自然観察、自然体験、科学的探究

図１　森林の多面的価値

写真８　時間の経過とともに巨木化する常緑広葉樹(タブ)
株立ちがかつて薪炭用に伐採されていた名残りをとどめる

写真９　かつての薪炭林が都市林として保全された落葉広葉樹の巨木林（ブナ） Epping Forest (London)

み込んだり、立地条件によっては用途に即した、ケヤキ、カツラ、ヤマザクラ等の樹種の導入も必要である。それは若齢林のみに偏るきらいがあった里山林に大樹の景観を加味し、そのような大樹を生活の場とする野生動物にも拠り所を与えることになる。しかし、これを実現するためには、やはり、これまでに述べた里山保全の意義と多面的波及効果について社会的に認識され、それが需要につながらなければならない。

５．新たな里山保全の目標と管理

ところで、里山が有する多面的な社会効果といっても、都市域に残存する限られた面積の里山と、都市近郊や農山村地域の広大な里山とでは、自ずとその保全や活用の上で重心の置き方が異なってくる。都市域に残された小面積の里山林なら、都市という人工空間にある自然の断片として、また、従来の都市公園にはない濃密な緑や野生動植物の生活の場としての保全が優先されるべきである。一方、面積が比較的広い場合や都市近郊のより広大な里山であれば、先に述べたような里山林が有する潜在力やこれからの社会的要請に対応して、次にあげるような多様な森林で構成されるのが望ましい（常緑広葉樹林帯における里山林を事例とする）。

（１）原生自然復元林

原則として人手を加えず、自然遷移を進行させてシイ、カシなど常緑広葉樹の巨木が優占し、林床植生も含め自立的に存続する樹林とする。倒木、落枝などもそのままにして自然林本来の生態系を復元する。人の立入りは避け、軽度の観察程度にとどめる（写真８）。

（２）常緑広葉大樹林

林冠を構成する常緑広葉樹の生長を見守り、大樹の森に誘導し保全する。林内は的確な植生管理によって、見通しや空間的広がりを確保し、林内への立入りが許容される。常緑広葉樹の大樹林がもつ暗く神秘的な森を特徴とする。

（３）常緑・落葉広葉大樹林

常緑広葉樹と落葉広葉樹が混交する大樹林で、適度の明るさと季節感を有するとともに冬季の緑も確保する。ヤマザクラやクリ、ハリギリなど衰退が顕著な樹種をはじめ、落葉広葉樹が樹冠を展開できるよう、適度に隣接する常緑広葉樹を除伐し、共存をはかる。

（４）落葉広葉樹大樹林

林冠のほとんどが落葉広葉樹によって占められる大樹林で、特有の明るさと四季折々の景観を特徴とする。比較的、落葉広葉樹の多い林分を選定し、常緑広葉樹の漸次の間伐によって誘導する（写真９）。

（５）雑木林管理林

若齢の林地や竹林が拡大した林地などを対象として、小面積ずつ 10～15 年周期程度の伐採更新方式で管理し、かつて里山で行われていた雑木林管理を動態保全する。このような環境を必要とする里山型の動植物の生存や誘致にとっても効果を発揮する（図２）。

以上にあげた森林タイプとその説明は、野生動植物の生存や自然との触れ合い体験、景観・アメニティ利用を中心にした、都市林的な里山の保全・活用に偏していると理解されるかもしれない。しかし、農山村地域の里山

であれば、これらのうちの大樹林を用材生産林に、また雑木林管理林をバイオエネルギー生産林等に当てはめればよい。その目的や気候、土地条件等に応じて、樹種や面積配分、収穫周期や方式等を柔軟に対応させるだけのことであり、要は常に持続性や多面的効果を念頭におくことである。

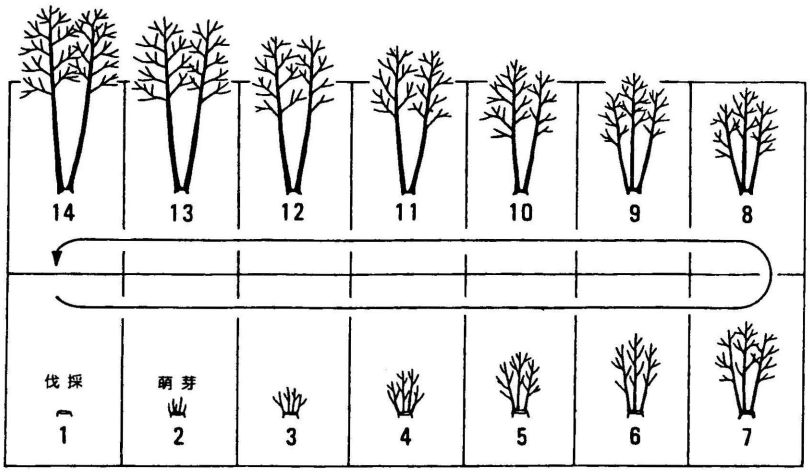

図２　薪炭林における伐採と萌芽更新のサイクル(14年の例)

６．今後の里山保全上の課題

今後、各地の里山を的確に保全してゆくには、スギ・ヒノキ人工林に転換されたものも含めて、現地踏査や航空写真解析等による詳細な植生調査を行い、どのような樹種構成や林齢、立木密度の森林がどのように分布しており、それぞれどのような魅力や可能性をもち、また、問題に直面しているかを把握する必要がある[9]。その結果を踏まえ、将来をも見通した長い時間軸で各地域の里山のあり方が検討されねばならない(表１)。スギ・ヒノキ林についても、単なる間伐管理の励行にとどまらず、土地条件や社会条件からみて天然林に戻したり、針広混交林や広葉樹林に誘導することも考えられてよい。

しかし、経済林とも称されるスギ・ヒノキ林でさえ経営困難な今日、そのような理想的な里山の森づくりを、どのようなシステムで誰が行うかが、大きな問題である。遠からず、地球規模の木材資源の枯渇や温暖化等の環境問題が一層深刻になり、社会や市場が里山に対処せざるをえない時代がくるだろうが、現時点では林地所有者に何らの直接利益もなく、また保全施策を進めるための社会的な共通認識や合意も形成されていないのである。このような時、対価を求めず、単なる労力奉仕でもなく、里山活動の楽しみや喜びを求めて、あるいは理想的な里山の自然や景観の実現を目標に行動できる市民の潜在力が注目される。

ただし、都会育ちの人々が多くなった今日では、かつて、多くの日本人にとって当たり前であった里山も、体験がない世代にはイメージしようもないし、あえて思い浮かべるとすれば現状のような、管理放棄により山道さえもヤブ化して立入りが困難な、暗く閉鎖された都市郊外の密生林でしかないという実状がある。たとえ散策道が整備されても、全体が暗く閉ざされた環境なので不気

表１　樹林高・樹冠幅・樹木被覆度による森林機能評価
（表中の数値は３段階のランクを示す）

機能項目　① 植生の安定度　② 大気浄化・気温調節機能　③ 景観・アメニティ機能　④ 生態的保全機能　⑤ 木材・バイオマス資源量　／：落葉樹林/常緑広葉樹林　－：該当なし

常緑広葉樹林・落葉広葉樹林

機能	樹冠 6m未満 / 樹高	樹木被覆度 75%以上	樹木被覆度 75～50%	樹木被覆度 50%未満	樹冠 6～10m / 樹高	樹木被覆度 75%以上	樹木被覆度 75～50%	樹木被覆度 50%未満	樹冠 10m以上 / 樹高	樹木被覆度 75%以上	樹木被覆度 75～50%	樹木被覆度 50%未満
①	16m以上	1	1	2	1	2	3	2	3	3		
	8～16m	1	2	2	1	2	3	2	2	3		
	8m未満	－	－	－	2	2	3	2	2	3		
②	16m以上	1	1	2	1	1	2	1	2	3		
	8～16m	1	1	2	1	2	3	2	2	3		
	8m未満	－	－	－	2	2	3	3	3	3		
③	16m以上	1	1	1	1	1	1	2/3	2/3	2		
	8～16m	1	1	2	1/2	2	2	2/3	2/3	2		
	8m未満	－	－	－	2/3	2/3	2	2/3	2/3	2		
④	16m以上	1	1	2	1	1	2	2	2	2		
	8～16m	1	1	2	1	2	2	2	2	2		
	8m未満	－	－	－	2	2	2	2	2	3		
⑤	16m以上	1	1	2	1	1	2	1	2	3		
	8～16m	1	2	3	2	2	3	2	2	3		
	8m未満	－	－	－	3	3	3	3	3	3		

スギ・ヒノキ植林

機能	樹冠 2.5m未満 / 樹高	樹木被覆度 75%以上	樹木被覆度 75～50%	樹木被覆度 50%未満	樹冠 2.5～5m / 樹高	樹木被覆度 75%以上	樹木被覆度 75～50%	樹木被覆度 50%未満	樹冠 5m以上 / 樹高	樹木被覆度 75%以上	樹木被覆度 75～50%	樹木被覆度 50%未満
①	16m以上	1	1	3	2	2	3	3	3	3		
	8～16m	1	2	3	2	2	3	3	3	3		
	8未満	－	－	－	3	3	3	3	3	3		
②	16m以上	1	1	2	1	1	2	1	2	3		
	8～16m	1	1	3	1	2	3	2	2	3		
	8未満	－	－	－	2	3	3	3	3	3		
③	16m以上	1	1	1	2	2	2	3	3	3		
	8～16m	2	2	2	3	3	2	3	3	3		
	8未満	－	－	－	3	3	3	3	3	3		
④	16m以上	1	1	2	2	2	2	3	3	3		
	8～16m	2	2	2	3	2	3	3	3	3		
	8未満	－	－	－	3	3	3	3	3	3		
⑤	16m以上	1	1	2	1	1	2	2	3	3		
	8～16m	2	2	3	2	2	3	2	3	3		
	8未満	－	－	－	3	3	3	3	3	3		

1：樹高2m未満は伐採跡とする。　2：樹木被覆度25%未満は、その他の区分とする。

味さや不安を感じ、近寄らない人も多いようである。そこで、里山との触れ合い体験を持ち、心に懐かしい思い出を秘めた世代が健在な間に、市民・行政・専門家のパートナーシップによる、自主的な市民参加のシステムが形成され、継続的な保全・管理活動の展開することが望まれるのである（写真 10、図３））。

以下では、まず、英国における市民活動展開の事例を紹介し、ついで日本における市民活動の実状と課題について述べたい。

写真 10　瀕死のヤマザクラを助ける市民参加の森林作業
陽光が当たるように被圧する周囲の常緑広葉樹を間伐
（福岡市鴻巣山もりづくりワークショップ）

７．英国ＢＴＣＶの保全活動と戦略

英国では「農家は国土の庭師」と言われる。日本の農家と同様に、営々と食料生産や薪炭生産等を果たすことを通して、国土を美しく維持・管理してきたからである。このような人間による有機的な生活と生産活動に伴って歴史的に生み出された風景と環境を文化景観（Cultural landscape）と言うが、化石燃料の普及や農業の機械化、過疎や担い手不足、安価な輸入木材や農産物などの問題から、世界的にその存続が困難になり、それぞれの国における地域独特の環境や景観、文化に影響するようになっている。このようなとき、都市住民のボランティア参加と地域住民の協力による里山・田園環境の保全活動は、重要な意味をもつ。そのような活動の先駆的な事例として、BTCV（British Trust for Conservation Volunteers：英国環境保全ボランティアトラスト）があげられる。

BTCV は、1959 年にロンドン郊外で42 人の会員で始まった“自然保護隊”を母体に、全国展開のため 1970 年に“BTCV”の名称で再発足した。その背景には第２次大戦後、英国でも薪炭林は役割を失い、機械化や近代農法の普及で伝統的な田園風景と自然環境も貧化していく実状があった。田園地域における重要な景観構成要素であり、かつビオトープ・ネットワークの根幹を成す生垣や石垣、並木などが機械化の障害として取除かれ、広々とした農地では単一作物が栽培されて、農薬や除草剤が大量散布されたからである。

当初の活動目標は、①田園地域での伝統的景観の維持を支援する、②会員に自然保護の原理と実践を訓練・教育する、③自然保護区など学術的に重要な場所の維持・管理を支援する、の３つだったが、BTCV として再発足する際、さらに、④田園地域における教育やアメニティ利用に貢献する、⑤都市地域での環境保全、自然復元活動を支援・促進する、⑥国民全体に環境に対する認識を啓発する、⑦学校教育現場での実践的な環境保全教育、自然保護教育を支援する、の４つが加わった。それは近

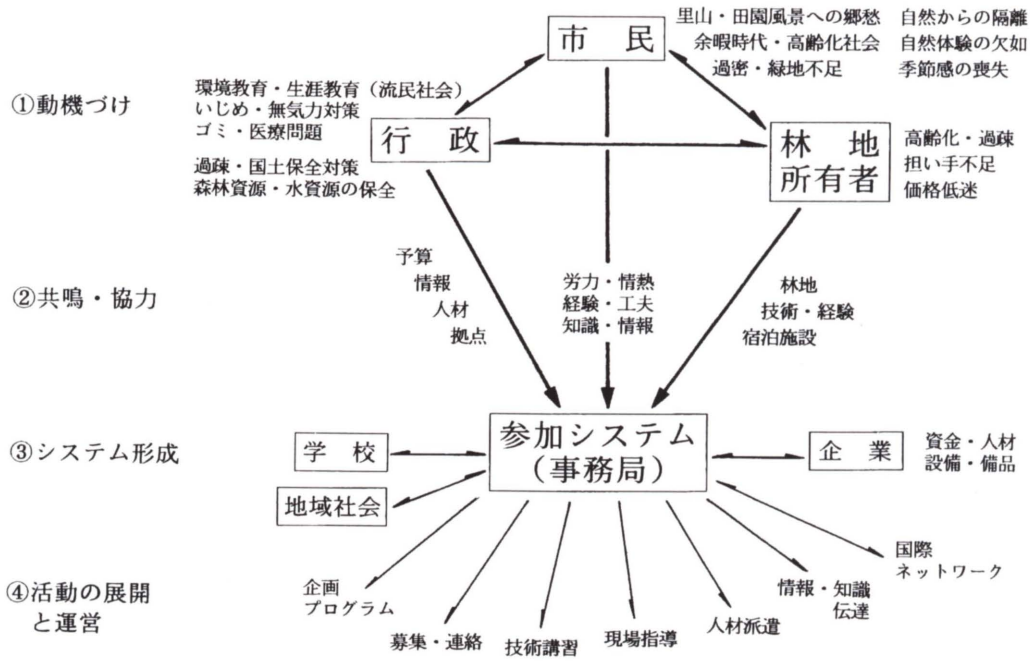

図３　森林保全のための市民参加システム形成のシステム

郊での都市化の進展、子供や市民の自然離れ、深刻さを増す環境問題や社会問題等への対応が迫られていたためである[10]。

BTCVの発展は目覚しく、現在では301人の職員を雇用し、ボランティア活動を組織するために、130の地方事務所と2030の地域保全グループを擁している。活動は政府機関や地方自治体、民間企業、財団との連携や支援を得て進めており、1998年度会計を見ると、16億円の年間予算のうち、保全活動による収入が25%を占めるほかは、中央政府から24%、地方自治体などの公共機関から16%、民間企業や財団及び個人から22%と、多くが助成金と寄付であり、会費収入は1%に過ぎない。

BTCVは目標達成のために、1週間単位の保全作業合宿（ワーキングホリデー）、週末に行われる日帰りの保全作業、学校の生徒や一般市民に対する教育・啓発活動、さらにリーダー養成や一般市民、失業者のための多岐にわたる技術訓練実習を実施している。1998年度には全国で550の保全合宿が実施され、約7000人が参加しており、これに週末活動などの活動を加えた延べ参加者数は約22万人・日に達している。（技術訓練実習およびBTCVが支援する地域グループや学校の活動等を加算すると、約77万人・日）

8．日本の里山保全活動と課題

日本の里山運動は、宅地造成やゴルフ場開発等で次々と姿を消す近郊の里山を守る開発反対運動として、また、ダムで水没する農山村の里山の暮らしや環境を守る建設反対運動として始まった。これらを含めると、日本の「市民による里山保全活動」も30年以上の実績があるとも言える。当時の里山を守る運動は行政や企業から敵視され、多くの国民からさえ自然保護をマスクにした政治活動と偏見をもたれたから、孤立無援の活動だった。開発は進む一方だったが、やがて守られた里山にも異変が生じていることに気づいた市民は、自ら管理活動に着手することになる。また、ダム建設が進む一方で周囲の里山もスギ・ヒノキ林に転換され、さらに管理放棄のために水源涵養能力を喪失し、地域社会も疲弊していくとき、見るに見兼ねた市民が間伐管理に出向くことになるのである。

こうして、「草刈り十字軍」のような先駆事例を別にすると、日本でも概ね15年ほど前から、市民による里山管理活動が、関東や関西の大都市周辺で始められるようになり、次第に地方都市や農山村にも広がって、現在では全国で400以上とも言われる団体やグループが活動している。活動内容も、①自然観察会や学習会の開催、②雑木林の保全・管理、③スギ・ヒノキ林の管理、④棚田の保全・管理など、活動体によって異なるが、活動暦の長い組織ほどこれらを複合して行っている。また、⑤里山管理のみならず専門家や地元古老の指導で炭窯を築き、炭焼きまですることで、収穫材の有機的活用と伝統技術の継承につなぎ、活動資金の一端にもするなどの展開や、⑥里山管理のリーダー養成セミナー及び技術演習講座等を継続的に開催する活動体も見られる。

このような発展の背景には弛みない活動の継続と社会の環境認識の高まりがあったことは言うまでもないが、さらに、以前の反目のしこりを越えて、その活動実績が行政や企業から次第に認められ、少しずつ活動助成や環境啓発事業委託等の支援が得られるようになったことも大きい。現在では支援が始まったころに比べ隔世の感がするほど、その幅や額は大きくなっている。しかし、その一方で今なお多くの団体やグループは各地で個別に、あるいは孤立して活動しているため、一部の団体を除き、活動する林地の確保や活動資金、道具や機材の確保、参加者の動員、さらに里山管理の知識やノウハウ等の不足に直面しており、活動の幅を大きく展開できない実状にある（図4）。このような現状では、BTCVのように潜在的な市民の参加意欲を全国的に引出し、「何時でも、何処でも、誰でも参加できる」ような機会を提供し、また、全国各地の里山や田園などにつなぐことはできない。

そこで、国内で活動している既存の活動グループや団体をネットワーク化し、情報や経験、技術や人材等の支援及び交換が必要となる。40年以上にわたる輝かしい実績を有するBTCVの全国的な活動の展開も、各地で結成された地域グループのネットワーキングと、農林業者や行政、それに企業や助成団体とのパートナーシップによ

①休眠期：　地域住民、行政ともに認識なし

②萌芽期：　地域住民、行政のいずれかが認識
活動を開始するが交流なし

③発展期：　地域住民が組織的活動を行い、
地域行政も対応しだす

④完成期：　地域住民が組織活動を展開する
地域行政が積極的に連携・支援

図4　市民活動の発達段階

る活発な、かつ粘り強い活動が礎となっている。日本におけるこのようなネットワーク組織の必要性と効果は、各地の活動グループや団体、そのスタッフや会員が認めるところであり、地域的には既にネットワーク化が実現している例もある。また、雑木林、森林、里地、水、生き物などをキイワードとする複数の全国集会が毎年開催され、情報交換のネットワークも進みつつある。しかし、都市近郊の雑木林や谷津田を活動対象の中心にするグループ、農山村のスギ・ヒノキ林を活動対象の中心にするグループ、さらに自然公園や自然保護地を活動対象の中心にするグループなど、それぞれの分野別にネットワークを組む気配も見られる。それはそれで意義があるが、里山保全や環境保全の問題は省庁の縦割りのように単純なものではなく、全てが密接に関係しているのである。それぞれ得意とする分野があって当然だが、より広い視野から相互に協力して、きめの細かい活動を展開し、また、参加希望者やクライアントにも多様で、かつ魅力的な活動メニューを提供できるようにしたいものである。

もちろん、そのような横断的な組織の実現には、当然、組織運営のための拠点や専任スタッフを確保する必要があり、継続的な活動資金や運営資金も不可欠である。先に日本でも行政や企業による助成や支援が広がったと述べたが、英国や米国等に比較すると、とても十分とは言えない。さらに、助成が短期間、かつ特定の活動に対するものが中心で、人件費や事務所費は認められないなどの制約から、地域的な活動組織さえ展開どころか、活動の継続すら心配されるという実状もある。加えて、NPO法人にかかわる法律はできたものの、その認定基準が厳格で手続きが煩雑な上に、寄付に対する税制上の制約など、まだまだ解決すべき課題は山積している[11]。

9．国際的な保全活動との連携と期待

従来の内外の研究調査から、密生した里山に再び間伐や柴刈り等の管理の手を加え、林内に陽光を射し入れることにより、多様な里山型の動植物が戻ることが報告されている[12]。筆者の実験調査でも自生ツツジ類やササユリの蘇生、開花等が実証されている[13]ことから、市民による手入れの効果は確実に現れるといってよい。こうして、多数の老若男女が里山に集い、活動することにより、里山に対する認識や発見、興味が着実に広がり、また、新たな信頼感や連帯感も培われるものと期待される（写真 11、表2）。里山の自然は都市砂漠に生きる都市住民にとって、自然回帰や健康づくり、人間性回復の場として打ってつけでもある。

近年、日本でも市民参加による里山管理が次第に活発となっているが、その展開が社会の共通認識や新しい価

表2　新入生合宿研修に対するアンケート結果
（回答者：九州芸術工科大学生 37 名）

1. 今回のような作業を以前に体験したことがありますか？	
1) はじめての体験だった	31
2) 以前に体験したことがある	6
2. 今回の合宿研修に参加した感想はいかがでしたか？	
1) 楽しく充実した内容だった	34
2) 期待したほどの内容ではなかった	2
3) つまらなかった	0
4) その他（期待以上）	1
3. 作業の内容はいかがでしたか？	
1) おもしろく，やりがいがあった	24
2) おもしろかったが，しんどかった	12
3) しんどさに，閉口した	0
4) その他	0
4. 今後も，このような機会があれば参加したいと思いますか？	
1) 是非参加したい	28
2) あまり参加したいと思わない	6
3) その他（微妙：2，あと1回くらいなら：1）	3

5. 自由回答（注：一部抽出．食事は有機栽培の米や野菜を食材にしたもの）

○環境や自然に対して積極的な考え，目標をもった人たち，地元の人たちの中で，やりがいのある作業ができた

○大学に入ったばかりのときに，学科だけで合宿したことによって結束力も高まり，交流を深めることができた！　場所もよかった！　内容もよかった！　ごはんうますぎ

○日常生活では体験できない農作業や林業の仕事を，頭で単に理解するのではなく，実際に参加させてもらったことはすごく貴重な体験だった

○もう全部が楽しく，いい体験だったので絶対また来たいです．来年の1年生にもお勧めだし，文句なしです．ご飯もおいしくて，ほんとうにすごくよかった！

○階段工事やタケノコ掘り，間伐作業など，全てのことが初めての体験で楽しかった．知らなかったことがたくさんあってとても勉強になったし，みんなで作業する体験を通して今までより仲良くなった．何気なく歩いていた遊歩道を作ることで，こんなに大変な作業をしていたんだということがわかった

○料理がおいしかった．建築物の設計に関しての考えがかわった．現在の林業のおかれている状況がわかった

○あの広い山を人が管理しているということを知って感動した

○何もかもが感動でした．あと1週間泊まりたい．また行かせてください

○10日くらい合宿して長期的な作業をしたかった（他に2泊3日希望が2名）

○ずばり楽しかった．絶対忘れません

○農林業とか絶対したくないと思ってたけれど考え方を変えることができた

写真 11　森林の中での異体験に熱中する学生
（学外演習によるヒノキ林での間伐作業）

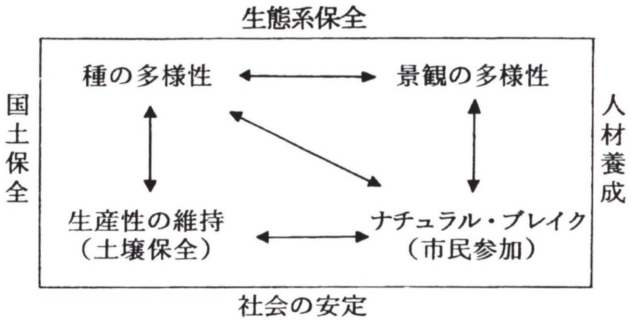

図 5　市民参加によるエコロジカルな森林環境修復の効果

値観、ライフスタイル等に波及し、持続的、かつ多様性に富んだ里山の保全につながると期待される。それは都市の環境保全や国土保全にも密接につながっていると言える（図 5）。

先に紹介した BTCV の活動の根底にも、環境教育や明日の社会を担う人材づくりという目標がある。それは里山・田園自然の中で同じ活動体験を共有することで培われる、共通の認識や価値観をもった人々の、世代を越えた連帯のネットワークづくりである。このような BTCV の活動戦略と効果は海外からも注目され、1988 年に EC(当時)の助成を受けた試験的な国際ワーキングホリデーがフランスで行われて以来、ヨーロッパを中心に世界各地で開催されるようになり、現在では毎年ほぼ 21 カ国、41 カ所で実施されている [14]。

日本でも 1994 年の和歌山県橋本市での実施を皮切りに、大阪、高知、兵庫、福岡、釧路、徳島、長野と各地で、延べ 15 回にわたり開催されてきた。いずれも、各地の地域活動グループが主体となり、BTCV との連携のもとに英国から参加する市民、ならびに日本国内の都市住民と地域住民が、ほぼ 10 日間の合宿で里山での常緑広葉樹の刈取りや除伐、スギ・ヒノキ林の間伐、崩壊した棚田の石積み修復等の作業を行うものである。これまで 5 回にわたり毎年行われてきた福岡県八女郡黒木町での国際ワークでは、回を重ねるごとに地域の人々との協力と共感の輪が広がり、若い農林後継者との絆や、石積みの経験や技術に長けた高齢者の協力の幅も大きくなってい

写真 12　自然体験を通して培われる感性と好奇心（Sense of wonder）（福岡市自然観察の森）

写真 13　地域住民、都市住民、海外ボランティアによる連携活動
国際里山・田園保全ワーキングホリデー（福岡県黒木町）

る（写真 13）。また、失敗や成功の中からノウハウや自信も蓄積されている[15]。近年では英国からのみならず、韓国、フィリピン、アルゼンチン、オランダ、米国からも参加を得るような展開も見られる。こうして、地元の人のみならず、国内外から参加した多くの人々にとって、ここは特別な思いのこもる場所になっているのである。

人間による里山・田園の動植物を守り・育む活動は、実はそのようなかかわりを通して、人間も守り・育まれる活動でもある[16]（写真 12）。そして、人種や宗教、職業や地位を越えて、地球温暖化や人口爆発・食料危機に直面する地球環境を守る目標とも連動しているのである。

1997 年 12 月に BTCV の呼びかけで、世界 9 か国の活動団体の代表による CVA（Conservation Volunteer Alliance：国際環境保全ボランティア同盟）設立準備会が開催され、1999 年 5 月には 14 か国、18 団体の本会議により正式に発足した。その戦略目標は、市民ボランティアによる保全活動をいっそう促進するとともに、人材や情報・技術・経験等を相互に交換することによって、地球規模で進行している環境破壊や生態バランスの喪失、景観の劣化などに対処することである。それは国によって、あるいは同じ国でも地域によって、市民ボランティア活動の規模や内容には大きな差異があり、それぞれが個別に、あるいは孤立して活動しているため発展しきれないという実態があるからである。

このような国際的な活動と連帯に対応するためにも、日本における全国的なネットワークづくりを実現したいものである。各地で活動する既存の保全団体の連携と、省庁の枠を越えた行政の支援、それに企業・財団等の一層の協力を期待するところである。

引用・参考文献

1） 重松敏則：「農山村と都市」共存のための定住化と土地利用秩序の形成、農村計画学会誌、Vol.6、No.2、pp.18-25、1987

2） 渡辺善次郎：「都市と農村の間」都市近郊農業史論、pp.388、論創社、1983

3） 上原三知・重松敏則：地域資源の保全と有機的活用による循環型地域システムの確立に関する基礎的研究、ランドスケープ研究、Vol.64、No. 5 、pp.831－834、2001

4） 重松敏則：里山の自然－その多様性と魅力、緑の読本、35 巻 17 号（シリーズ 52）、pp.1－7、1999

5） 重松敏則：環境保全と里山、農業と経済、Vol.68、No.3、pp.53－60、2002

6） 千葉徳爾：はげ山の文化、学生社、1973

7） 中村敬・重松敏則：都市内残存林におけるヤマザクラの着花状況と消長に関する研究、ランドスケープ研究、Vol.63、No.5、pp.469－472、2000

8） 前原大輔・重松敏則：都市内残存林における 4 種の落葉広葉樹種の分布と生育状況に関する研究、ランドスケープ研究、Vol.64、No.5、pp.529－532、2001

9） 重松敏則・朝廣和夫・瀬戸島政博・牧田史子：現存植生環境動態図の作成とその活用に関する基礎的研究、ランドスケープ研究、Vol.60、No. 5 、pp.527－530、1997

10） 重松敏則：英国 BTCV の田園景観及び森林生物環境の保全活動について、日本造園学会誌、Vol.55、No.5、pp.325－330、1992

11） 重松敏則：里山保全と市民参加による管理活動の展開、環境情報科学、Vol.31、No.1、pp.58－62、2002

12） P. Buckley 編、「Ecology and Management of Coppice Woodlands」、Chapman & Hall、1992

13） 重松敏則：「レクリエーションを目的とした二次林の改良とその林床管理に関する生態学的研究」、大阪府立大学紀要（農学・生物学）Vol.40、pp.151－211、1988

14) Anita Prosser・Andrea Mannings ：The international future of conservation volunteering、BTCV、1998

15） 重松敏則・小森耕太・朝廣和夫：市民参加による里山・棚田保全活動の実績分析とコスト評価に関する事例研究、農村計画論文集、pp.73～78、1999

16） 杉山恵一・重松敏則（編著）：ビオトープの管理・活用－続 自然環境復元の技術、朝倉書店、2002